今月の巻頭言

課題解決に教育センターの利用を

柏崎市立教育センター
所長　　中山　博迪

４月に入ってからの天候不順で開花が大幅に遅れた赤坂山公園の桜もようやく散り始め、春本番を迎えようとしています。

昨年度は、多くの教職員の皆さんに教育センターの「専門研修講座」や「教育相談」を利用していただき、ありがとうございました。

今年度も「新しい教育　柏崎からの発信」をスローガンに、「教職員研修」と「教育相談」を中核に据えながら、子どもたちの生きる力の育成や学校教育の課題解決、柏崎市の教育行政の円滑な実施などを目指しながら、数多くの取組を行っていきます。ご協力よろしくお願いします。

教育研究班では、組織面で今年度いくつかの変更点があります。その一つが「校務の情報化」（スクールオフィス）に対応して指導員を増やしたことです。昨年度末に導入した「教職員のコンピューター人一台配備」に伴い、その運用がスムーズに行われるためのサポートが主な職務となります。また長年続いてきた地区理科センターへの「専任所員派遣制度」が廃止され、今年度から新たな制度がスタートしました。「非常勤嘱託の専任所員」（１日６時間勤務）と学校籍の「センター協力員」（半日勤務）が配置され、この２人を中心に今までの科学技術教育関係の事業を運営することになりました。「理科センターとしての機能」そのものは維持されますが、特に初年度は、今までどおりのサービスは難しくなることも予想されます。ご理解とご協力をお願いします。

昨年度、教育研究班では、最終的には１３１の講座を実施し、延べ２５００人の教職員が受講されています。養護学校など県立の学校を除きますと一人当たり平均３.０回の参加がありました。一昨年が２.４回でしたので大幅に増加しております。特に中学校はすべての学校で増加しました。皆さん一人一人の研修意欲の表れではないかと感謝しています。

近くにいて中身の濃い研修を受けることができるメリットを大いに活用し、教職員の資質向上、スキルアップに役立てていただきたいと思います。

そしてそのことが、ひいては柏崎刈羽の子どもたちの学力向上や生きる力の育成につながるということを、改めて認識していただきたいと思っています。

今年度も、１２０の講座を用意しました。今日的な課題やニーズに応じた多彩な内容など質量共に充実した講座が、たくさん計画されています。一人最低２回以上は、講座等でセンターを利用していただきたいと願っています。

教育相談班は、昨年度と同じ１０名体制で相談業務や適応指導教室（ふれあいルーム）の指導に当たります。学校で困った事例がありましたら、教育相談班に遠慮なく電話していただきたいと思います。具体的には、いじめ、不登校、発達障害、子どもの心の問題、保護者対応などに、是非、教育相談班を利用してください。早期の対応が何よりも解決を早めます。手遅れになると多大なエネルギーを使うようになります。未来のある柏崎刈羽の子どもたちのためにもよろしくお願いします。

今月の巻頭言

今年も３・３・３、今年こそ３・３・３

柏崎市教育委員会
学校教育課長　廣川　正文

柏崎の教育３・３・３運動は平成１４年度にスタートしました。「子どもの健やかな成長を求め、学校・家庭・地域で大人も一緒に取り組もう」というスローガンのもと始まった運動です。これまで小・中学校関係者を中心とした多くの方々のおかげで、少しずつではありますが、着実にこの運動が広がってきています。しかし、市民の多くが認識している全市的な取組になっているかというとまだまだといったところです。

この度、市の機構改革による子ども課の教育委員会への移管を機に、３・３・３運動の幼稚園・保育園版のポスターを作成し、園を通じて３歳以上の園児がいる全ての家庭に配布したところです。これまでの小・中学校用のポスターと同様にそれぞれの家庭で家族の目につく所に掲示して、家族みんなで意識して一緒に取り組んでほしいと願っています。

最近でも毎日のようにテレビや新聞等の報道で、子どもへの虐待、いじめ・不登校問題、学力問題、運動能力や健康に関する問題等が話題になっています。どれ一つ取り上げても簡単に瞬間に解決できるような問題ではないと思います。しかし、解決への糸口は全て、私たちが今取り組んでいる柏崎の教育３・３・３運動の中にあるのではないでしょうか。

今回配布された幼稚園・保育園版のポスターの真ん中にあるのは「みんなえがお」というキーワードです。みんなが笑顔でいるために、「心身ともに健康な、友だちと仲よくできる、感性豊かな子ども」に成長することを願いながら大人と子どもが一緒になって、こんなことに取り組んでみませんか、ということが示されています。乳幼児期に、このような体験を積んだ子どもが小学校、中学校でさらに様々な体験を重ねていく。この一連の流れがとても重要になります。

昨年度から、全中学校区が各中学校区ならではの小中一貫教育の推進に取り組んでいます。様々な取組の中で、柏崎の教育３・３・３運動を意識した課題を共有し、実践しているわけです。この取組の継続は、必ず生きる力を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成につながるはずです。保育園・幼稚園、小学校、中学校、家庭、地域がともに力を合わせて、信念をもって柏崎の教育３・３・３運動を展開しようではありませんか。

今月の巻頭言

社会性を育もう

柏崎市教育委員会
教育委員長　　山﨑　高美

本年度から新たに、「深めよう“絆”県民運動」がスタートしました。これは、人と人との絆を深め、いじめ、不登校、暴力行為などの未然防止・解消に努めることです。運動の重点は、小中連携による地域全体での社会性の育成です。

社会性とは、集団をつくって生活をしようとする人間の基本的なことであり、人と関わる中で育てられていくものです。対人行動、集団行動がうまくできて、社会的な関心を持てることが大切と思います。

しかし、現実は、少子化・核家族化・情報化の進展などにより、子どもたちの体験活動の減少やコミュニケーション不足による人間関係の希薄化等が見られ、基本的な生活習慣・マナー・倫理観・公共性や規範意識が薄くなっています。

人間関係の形成は、子どものころから、とりわけ乳幼児のころからが大切であり、両親・親戚・周囲の人など、他者との相互行為・コミュニケーションが大変重要であります。

そして、年代が上がると共に、友だち同士の関わり・大人との関わりの中から、人と繋がる力「人間関係調整能力」を付けさせなければなりません。

幸いにも、子ども課業務が教育委員会の所管となり、幼児期から「柏崎の教育３・３・３運動」に取り組めるようになりました。この運動は、幼・保育園や学校のみの取組ではなく、家庭や地域と連携して取り組もう、大人と一緒に取り組もうということです。取組は、家庭でのテレビやゲームの長時間接触をセーブしての生活習慣の確立や手伝いなどを通した親子の交流、学校や幼・保育園では集団でのふれあいを通じ望ましい人間関係の育成、地域では自然体験・社会体験を通して多様な大人との交流、などです。このような取組から、倫理観や規範意識、又公共性が培われ、自己肯定感が育てられると思っています。こうして、子どもたちは社会性を人との関わりの中で身につけて行きます。

しかし、子どもたちを教え導くのは、親であり大人です。今、大人の規範意識の低下が、子どもたちの健全育成に大きな影響を与えています。親や大人が社会的なルールやマナーを守ることが大切であり、意識の改革が必要です。

「大人（親）が変われば、子どもも変わる」を肝に銘ずる必要があります。

今月の巻頭言

種　を　蒔　く

教育センター運営委員
刈羽村立刈羽小学校長
田中　俊範

野原の草花にとって、いつ、どこで芽を出すかは死活問題だという。芽を出す時期が寒さ、暑さに向かう時であったり、周囲に背の高い草花があったりする場合は、成長はおろか生存さえ危ぶまれてしまう。そこで、このようなことがないように草花はいろいろな知恵を絞り、自分の子孫を増やそうとしている（らしい）。何千、何万粒という種を作り、一気に発芽させず、数年にわたって発芽できるようにしたり、一定期間寒さに当たったあとの暖かさに触れることにより初めて発芽したり、あるいは他の草花に先駆けて芽を出したりといろいろ工夫があるという。

野原の草花と違って栽培種の種（たね）は、人の手厚い保護のもと無事に発芽し、成長を続けると思われているが必ずしもそうではない。発芽には①適当な温度　②水　③空気が関係していることは５年生の理科で学習する。しかし、このような条件が揃っていても必ずしも高い確率で発芽するわけではない。私も年間３０種類以上の野菜や花の発芽を試みるが、思ったように芽が出ない場合も多い。年数が経った種であったり、かたい殻に覆われたり、厚く土をかぶせ過ぎたり、はたまた、発芽を待ちきれずに掘り返したりと、人為的なことも含め発芽には様々な要因が絡んでくる。反対に自然に落ちた種から、思いもしないできのよい苗ができるなど、種がもつ生命力の強さを感じる場合もある。結局は発芽率を高めるには、その種（たね）がもつ性質をきちんと理解して、播種することが大切なようである。

ホームセンターなどでは様々な野菜や花の苗が春早くから並んでいる。より早く、より多く売るための戦略なのだろうか、年ごとに並ぶ時期が早くなるような気がする。春は決してあせる必要はないように思うのだが・・・・。（自分で種から育てたものとは２週間位の違いでしかない。）また、新たな品種も次々出ている。華美、味のよさ、安定した収穫、耐病性などが謳われているが、あまりにも多過ぎる品種にとまどいを感じてしまう。それほど華美でなくてもいい。多少味にくせがあってもいい。そんな花や野菜の種を蒔き、１粒の種のもつ神秘さを感じつつ、自分で育てたという実感を味わいたいものである。

数年前、手に余るほどの広さの畑を借りた。どうすれば、その畑を野菜の苗で埋めることができるか、そして、経済的な負担を最小限に抑えることができるかを考えた結果が「種を蒔く」ことだった。とりあえずは、その問題は解決できた。これからは、Ｆ１種や近似種の交雑に気をつけながら自家採種を進めたいものと考えている。

１粒の小さな種には、溢れんばかりの命とエネルギー、そして、たくさんの不思議が詰まっているのである。

今月の巻頭言

「武士の一言」に学ぶ

教育センター運営委員
柏崎市立第三中学校
校長　神 谷　敬 二

教職生活も残すところ３年半強となりました。この間、先輩諸氏から「教師は常に研修に励まなければならない」とご指導いただき、「ならば何冊も本を読もう」と頑張って教育書なるものにチャレンジしてみたものの、たった数頁で眠気に負ける自分でした。ところが、今流行の歴史書なるものの場合だけは、どんどんその世界に引き込まれる自分がいました。そこで、ここ数年は、時間があると専ら歴史書と親しむことが多くなりましたが、そんな中で気付いたことがあります。それは、戦国武将たちが残した言葉の中に、今の時代でも大事にしたい考え方や生き方があると言うことです。そんな武将たちの残した言葉を、手っ取り早く一冊にまとめた本はないだろうかと探していたところ、出会った本が「武士の一言」（火坂雅志 著）です。その一部を紹介します。

「夏の火鉢、旱（ひでり）の傘」（黒田官兵衛の言葉：1577 年、中国攻めにやってきた秀吉に恭順し、戦いに功を立てて参謀役に。四国攻めや九州攻めに尽力。関ヶ原の戦いでは東軍に加担してほぼ九州全土を制圧した。）

これは、官兵衛が息子長政に語った教えの一つで「どのような人間であっても、広く大きな気持ちで使わなければならない。暑い夏の盛りの火鉢や旱の時の傘はものの役に立たないが、底冷えのする冬、土砂降りの雨ともなれば、なくてはならぬ物になろう。人もそれと同じだ。ある局面では役に立たぬ人間であっても、別の局面になれば思わぬ才を発揮することもある。それゆえ、この言葉をよくよく噛みしめ、寛容な心で接するように。さもなければ、家臣たちはそなたに心服しないであろう。」との意味が込められているようです。

「急用のことなり、静（しずか）に書（しよ）すべし」（小早川隆景の言葉：１５３３－１５９７。毛利元就の三男として生まれ、安芸の小早川家を相続した。直属の水軍を持ち、毛利軍の一翼を担った。）

祐筆に急ぎの書状を書くよう命じたとき、あわてて筆をとった祐筆に言ったのがこの言葉であると言われています。この言葉の意味することは、「急いでいるということは、裏を返せばその用件が重要であることを意味している。重要であるからこそ、できるだけ早く伝えなければならない。皮肉なもので、一字一句間違ってはならないと緊張しているときにかぎって間違いをしでかすものである。言葉というものは恐ろしいもので、ちょっとした過ちが大きな誤解を招くこともある。それが合戦の引き金にもなってしまう。」との意味が込められているようです。このことは、人生においても同じことが言えるのではないでしょうか。「悠々として急げ」という言葉がありますが、いかなる局面でも悠然として、しかも迅速に行動できるわざを身に付けることができたら、生きる上でこれほど心強いことはありません。

戦国時代という死と隣り合わせの中で生き抜いてきた武将たちの言葉だけに、ずしりと重いものを感じます。

今月の巻頭言

食について思うこと

教育センター運営委員
文教経済常任委員長
若井　洋一

私たちが生きていくために何が必要なのか？それは食であり、食べ物を食べることによって私たちの生命が維持されているのです。その食べる物、それは動物であったり、植物であったり、魚類等であったりと、多くの物からその命をもらい生きていくことができるのです。私たちはこの食べ物の命に感謝し、そして楽しく食事をする、このことが、私たちが生きていく中で一番重要であります。

二十数年前にミニマムアクセス（国内消費量に比して輸入の割合が低い品目について、最低限の輸入機会を設けること。）の関係で、海外から米が輸入されたことは皆様ご承知のとおりでありますが、この米については「まずい」「とても食える物ではない」という声が多く聞かれました。

世界では、食べ物を作ることができない地域もあり、また食べ物が少なく、食べることができない人たち、すなわち飢餓人口が十数億人もいるという報道もされています。小さな子どもたちが食べることができなくて死んでしまう、そういう悲しいことも事実であります。一方、政策の関係で、米があるにもかかわらず輸入しなければならなかったこと、政治の世界とはいえ、財力にものをいわせるやり方、これらのことについて憤りを感じたことを覚えています。

いつの時代でも、人間が生きていくには平等でなければならないし、お互い助け合っていく、そういう時代になってほしいと切に願っています。

今、朝食をとらずに学校に登校する児童生徒、また、子どもたちだけで食事を取っている家庭も多くあると報道されています。また、朝食を食べない子どもたちは、すぐキレる等、精神的に変化が出てくるとも言われています。家族状況、生活環境の変化など、多くの状況があることは仕方ないことなのでしょうか？それぞれの家庭で、努力しようではありませんか。

食料を作る生産現場や、私たちが毎日食べる食材の重要性等を子どもたちに教えていくこと、そのことが今求められているのではないでしょうか。

今月の巻頭言

子育て支援について

教育センター運営委員
元気館子育て支援センター
ｾﾝﾀｰ次長（地域子育て係長）鳥島　一弘

「行政が子育て支援をしすぎるから親がだめになる？」

あるベテラン市民の方からこんな意見をいただきました。おそらく、ご自身の子育て体験を踏まえての最近の若い世代の親たちへの不満なのでしょう。確かに、子育て相談の内容にも、現在の子育てに対する不安が多くつづられていますが、現在の悩みを相談いただくことは、今後の子育てに役立つことであり、とてもいいことだと思います。

しかし、子育てを始めたばかりの親１年生には、不安も悩みも学ぶこともたくさんあり、まして、仕事を持ちながら子育てを続けることは本当に大変です。現在の保護者にとって必要と思われる子育て支援に関しては、国を始めとして更なる充実が求められているように思います。

子育て支援は、親育ち・子育ち支援

「子育てを一生懸命するうちに、自分も親として、人間として成長した気がする」という意見を子育て中の親から聞くことができます。子どもの成長を見守り、養育する親のスキルアップを支援するという子育て支援の構図となります。

昨今の幼保一体化、放課後子ども対策の統合検討に代表される児童福祉と教育の両分野の一体的な取組が子育て支援にも当てはまるものと思われます。高齢者福祉分野における保健事業との一体化と同様に、児童福祉分野においても、親教育・家庭教育と切っても切れない関係にあります。

子どもの成長する力、学習する力を親が支え、その親を行政・教育機関あるいは地域が支える・補完する制度や仕組みを充実させていくことが求められています。

子育て支援は、孤育て防止・虐待防止 ～キーワードは、地域の見守り・助け合い～

子育て支援施設・機関は、元気館子育て支援センター以外にも、公立保育園が２１園、私立保育園が１０園、私立幼稚園が５園あります。そして、保育園・幼稚園には１５の子育て支援室が開設されています。また、いくつかのコミュニティセンターでは、子育て広場が開催され、子育て中の親子等の交流スペースとなっています。

さらに、市内には民生委員・児童委員および主任児童委員の方々が、お年寄りや子どもたちを見守ってくれています。その他、世話好きなご近所さんもいることでしょう。

「子育てを一人で悩まない」、「ご近所同士の声かけや助け合い」そして、「専門機関による相談支援」で孤立した子育て環境をなくし、子どもの健やかな成長を支え、ひいては子どもの虐待を予防できればと願っています。

福祉および教育関係機関の皆様の子育て支援に対するご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

今月の巻頭言

地球温暖化は本当か？

教育センター運営委員
新潟工科大学・工学部・環境科学科
准教授　小野寺　正幸

昨今のエコブームの中、「このままでは地球は温暖化して大変なことになる」と新聞・テレビ・ラジオ等のマスコミによる大合唱がなされている。しかも、その元凶は、CO_2（シーオーツー、二酸化炭素）であるとのこと。確かに、CO_2は赤外線を吸収する性質があり、地下資源である石油・石炭・天然ガス等を燃焼させれば最終的に CO_2 と H_2O になり、それらが大気中に拡散し、大気中の CO_2 濃度が増加し、その結果として地球は温暖化しているとの説明は、何となく正しいように聞こえる。しかしながら一方では、「地球はこれから寒冷化していく」、「地球が温暖化して海洋の温度が上昇し、その結果として海洋に溶けていることが出来なくなったCO_2が大気中に放散し、大気中のCO_2濃度は増加している」等、地球温暖化そのものや地球温暖化 CO_2 元凶説に異議を唱えている科学者も多くいるのも事実である。

そもそも地球温暖化というのは、地球のいつの時代を基準にしているのであろうか？古気象学という学問分野の研究によると地球の温度は一定ではなく、変動しているとのことである。原因はいくつかあるみたいだが、太陽活動の変動や地球の公転・自転の変動等人類の人為的な活動以外の要因によるものとのことである。縄文時代の日本は、今より温暖な気候であったみたいで、青森県の三内丸山遺跡の発掘研究からもそれを支持している。海外に目を向ければ、氷河で覆われているグリーンランドも発見当初は、海岸沿岸部は草原に覆われていたとの説もある。

地球温暖化は、人類や環境に悪影響を与えると言われているがこれも本当なのか？洪水や旱魃、巨大ハリケーンなどの異常気象もすべて地球温暖化が原因みたいな報道が毎日のようにされている。筆者には行き過ぎのように思えて仕方がない。

別に筆者は、地球温暖化は嘘だとか、地球温暖化に CO_2 は関係ないとか言うつもりはない。それぞれの専門家がそれぞれの観測データや過去の知見をもとに提唱しているのであるから、最終的には、個人個人が判断を下すしかないであろう。そうすると、個人個人がそれなりの最低限の自然科学に関する知識なり、感性を持っていることが必要になるのではないだろうか？昨今の子供たちの理科離れに危機感をもつのは杞憂であってくれればと祈るしかないのであろうか？

今月の巻頭言

「考える」を考察する

教育センター運営委員
柏崎市立第二中学校長　　近藤　道範

新学習指導要領では、確かな学力を育成するために、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等をはぐくむことのバランスを重視することが求められています。少し乱暴な言い方をさせていただくと、「教師が教えるべきことをしっかりと教え、児童生徒が自らの生活経験や既習内容を基にじっくりと考え、自ら判断し、表現する授業」への転換が必要とされています。しかし、授業改善の方向性は分かっても、なかなか新学習指導要領の趣旨通りにいかないのが実際の授業です。その原因はなんなのかと思いを巡らした時に、「考えさせることの難しさ」にあるのではないかと思うのです。

私たち教員は、「考えさせる授業」とか「考える時間を保証する」という言葉を割と安易に使いがちですが、子どもが脳をフル回転させて考える時間が、一時間の授業の中に果たしてどれだけあるのか疑問が残ります。私自身は、中学校社会科を３０年近く担当してきたのですが、例えば「２年生の歴史の授業で、生徒が１５分間、真剣に考え続けている学習活動の例を３つばかり挙げなさい。」と自問した時に、正直なところ戸惑いがあります。
「複数の社会事象を関連付け、因果関係を説明する活動」とか「史料から原因や結果を予測する活動」「歴史的事象の価値判断を巡り討論し合う活動」などともっともらしいことを答えることは簡単ですが、その活動が本当に「考える活動」なのか、「判断する活動」や「表現する活動」とどのように異なるのか、自信をもって説明することはできません。
「考える」という活動を的確に説明することは意外と難しいことなのではないでしょうか。

「考える」ことを仕事とするプロ棋士　羽生善治名人が、脳科学者茂木健一郎さんとの対談の中で、「思考のトップスピードに入っている時は、あまりたくさんの手を読んでいないんです。なんとなくこれが正しいんじゃないかという感覚がすごく研ぎ澄まされて、これは行けるとかこれはだめという判断が素早く下せる状態だと思います。」と興味深いことを述べています。
羽生名人の言葉からすると思考と判断は表裏一体の関係にあるようにも思えます。「考える」とは、既習の知識や経験を想起し、取捨選択し、組み合わせ、関係付けながら課題に最適な解を判断し、表現する総合的な活動といえるのかも知れません。しかしそう考えると、思考力と判断力と表現力を明確に区別することが難しくなってきます。

どうやら新学習指導要領が全面実施される前に、各教科の授業において子どもが全力で「考える」学習活動とはどのようなものであるか、具体的な単元の中で「考える」活動を組み入れるにはどのような学習課題や発問が有効なのか、私たち教員自身がじっくりと考える必要があるように思います。